

きりしまDXアイデアソン

2024.2.18 sun 13:00~17:00

会場：国分シビックセンター 別館4階 大会議室

参加人数：26名

参加団体：(株)九州タブチ、(株)藤田ワークス、南九州ケーブルテレビネット(株)、JA あいら、霧島商工会議所、鹿児島工業高等専門学校、第一工科大学

内田CIO補佐官の「おもひ」

令和4年度に、霧島市のDXについて産学官で話し合う「きりしまDXコンソーシアム」がキックオフした。その中で、「年齢も業種も違うメンバーが話し合い、新たなアイデアを生み出す場を作りたい」という、内田CIO補佐官の強い「おもひ」から、今回「きりしまDXアイデアソン」の開催に至った。企画等を内田CIO補佐官自らが行き、斬新な意見が生まれるよう、「アイデアソン」というイベントを「デザインシンキング」という手法を用いて行った。



アイデアソンとは

「アイデア」と「マラソン」を掛け合わせた造語で、短時間で多様なアイデアを生み出すイベントのこと。企業等が新しい商品開発の際などに行う手法で、今回は、新しいア

アイデアの創出と産学官の交流を目的に、所属や年齢が異なるメンバーで議論した。



デザインシンキングとは

デザインシンキングとは、問題解決やイノベーションのための手法。ユーザーのニーズや感情に焦点を当て、創造的で革新的な解決策の創出を目的として行うもの。最近では、日本企業でも導入が始まっている。今回は、5人のモデル（人物

像)を事務局側で準備し、その中からグループで一人を選んでもらい、その人が「言う」「感じる」「やる」「思う」だろうことに着目し、何を欲し、解決のためにどんなサービスが必要か、といったことをユーザー目線で話し合った。

当日の流れ

当日の流れは以下のとおり。



各グループにコンソーシアムのメンバーをアドバイザーとして配置し、助言等をもらいながらグループワークを進めた。初めは、全体的に緊張した雰囲気のなか始まったグループワークも、中盤は積極的に意見が出始め、最後にはグループで記念写真を撮るくらい打ち解けていた。

モデル選定

様々な環境に置かれた5人のモデル*をグループごとに選択する。各グループで話し合い、イメージしやすいモデルやデジタルデバインドで困っているであろう、モデルを選択した。

AとB：国分在住、32歳、シングルマザーの伊藤さん

C：牧園町在住、68歳、夫と二人暮らしの高橋さん

DとE：福山在住、27歳、未婚で親と同居の大塚さん



グループAとB、DとEはそれぞれ同じモデルを選択し、Cのみ違うモデルを選択した。モデルの情報は他にも、年

収や職業、趣味などがあり、その情報を基に、自身がモデルになりきって作業を行った。

※Chat GPT が作成した空想の人物



まずは、個人ワークで、モデルになりきりその人の「言う」「感じる」「する」「思う」だろうことを付箋に書き出した。書き出した付箋を分類し、それを基にこのモデルが「いつ」、「どんな時」、「どんなことを欲しているか」をグループで話し合い、人物像を深堀した。

グループ A と B は同じモデル（伊藤さん）で、共通して子どもに関する付箋が多かった。また、同じモデルながら違いもあり、グループ A は、子育てしながらも自分の時間を作りたいと考えており、食事のための買い物や料理を負担に感じている人物像をイメージした。グループ B は、子どものために貯金をしたり、新しい仕事を探したりと、子ども中心の生活を送っている人物像をイメージした。



グループ C は高橋さんを孫との時間を楽しみにしている人物をイメージした。グループ D と E も同じ

モデル（大塚さん）で、地元や海が好きなところは同じ人物像となったが、D の大塚さんは、都会への憧れがあり、新しいことを始めたいと思っている。一方、E の大塚さんは、地元から離れるイメージはなく、身近な願望（新しい釣り道具が欲しい、釣り仲間が欲しい等）を持った人物像となった。

✚ 解決策の模索

モデルの深堀を行い、欲しているもの・ことのイメージが出来上がったところで、どんなサービスで解決できるかを話し合った。既に実在するものから、今は無いがこんなサービスがあったらいいなというものをまとめた。また、サービスは既に実在するのになぜ使わないのか等についても話し合った。

発表の方法は細かく指定せず、それぞれのグループで話し合ったことを発表してもらった。アドバイザーからは質問が多数あり、発表グループは丁寧に答えた。



各グループで話し合われていたアイデアは、冷蔵庫の中身の把握から献立作成、足りない

材料の発注、調理までしてくれる自動調理器やバーチャルで過去の身長・姿が見えるアプリ、スマホ教室の CM に対象者に影響力がありそうなタレントの起用等があった。



最後にアドバイザーの方々からは、進行のサポートや助言等を行う中で思ったことなど、コメントをいただき、アイデアソンをまとめた。

✚ 内田 CIO 補佐官のコメント

初対面の異業種のメンバー間で、闊達なコミュニケーションが出来て有意義だったのではと感じました。このような場において継続的に意見交換することで、新たな発想が生まれると思います。